The Japanese Society of Gastroenterological Surgery

373　消化管粘膜下腫瘍の染色体遺伝子異常の解析

[1]京都府立医科大学第一外科、[2]同衛生学、[3]東大医科研、[4]大阪大学・医・病理学
安岡 利恵[1,2]、藤田佳史[1,2]、中西正芳[1,2]、荒金英樹[1,2]、小出一真[1,2]、阪倉長平[1,2]、高橋俊雄[1]、山口俊晴[1]、萩原明於[1]、大辻英吾[1]、廣田誠一[4]、北村幸彦[4]、中村祐輔[3]、稲澤譲治[2,3]、阿部達生[2]

［目的］ＣＧＨ法を用いて、粘膜下腫瘍の染色体遺伝子の解析を行い、また、近年報告された c－kit 遺伝子の異常もあわせて検索する事で、良悪性判定の指標となりうるゲノム異常の同定を試みた。［材料と方法］ＣＧＨ法により消化管粘膜下腫瘍１２例の copy number karyotyping を行い、病型や悪性度に関する欠失、過剰、増幅などのゲノム異常を検索した。［結果と考察］悪性粘膜下腫瘍では染色体異常と、c－kit 遺伝子 exon１１の変異、欠失が高頻度に認められたが、良性ではさほど認めなかった。これより、粘膜下腫瘍に特徴的な染色体の異常を同定し、更に、c－kit 遺伝子の異常が良悪性診断のマーカーとして臨床応用可能である事が示唆された。

374　大腸癌患者における周術期の輸血が、術後の免疫能に及ぼす影響

三重大学第二外科
岩永孝雄、三木誓雄、石島直人、登内仁、鈴木宏志

[目的]：我々は、周術期の血中免疫抑制酸性蛋白（IAP）の変動から輸血と免疫抑制との関連を検討した。**[対象と方法]**：大腸癌治癒切除患者58名を対象とし、患者を輸血が施行された15例、周術期無輸血例43例の2群に分類し、周術期の血中IAPを測定した。また濃厚赤血球液中のIAPも冷蔵保存中経時的に測定した。**[結果]**：対象患者の術前IAP平均値は、362.4μg/mlでコントロール群の295.0μg/mlに比し有意に高値を示したが(p=0.015)、臨床病理学的因子及び手術治癒度による差は認めなかった。血清IAPは術後漸増し、3日目～7日目にピーク値に達した後、約3カ月後に術前の値に復した。輸血群と無輸血群の比較では、血清IAPは術前値において両群に差を認めなかったが、3日目～7日目に輸血群では無輸血群に比して有意に高値を示し、約3カ月後においても高値を示した。また濃厚赤血球中のIAPは、いずれもコントロール群に比し差はなかった。**[考察]**：周術期の輸血により、術後3ヶ月まで免疫能が抑制されていることが示唆された。今回の結果は輸血と悪性腫瘍の術後患者の予後との関連を裏付けるものと考えられた。

375　術後多臓器不全症例の検討

東京医科大学霞ヶ浦病院外科、同集中治療部*
岡本光順、柳田国夫*、田渕崇文、田崎太郎、小西　栄、渡辺睦弥、片野素信、渡辺善徳、後藤悦久、生方英幸、佐藤茂範、中田一郎、相馬哲夫、清水あさみ*

【目的】外科手術後に多臓器不全(MODS)を来した症例の検討。【対象と方法】1993年1月から1998年7月までに当科で行った悪性腫瘍に対する消化器外科手術(570例)後に発生したMODS 症例を対象とし、発生頻度と予後、Sepsis合併例の予後、血中lactate値の推移と予後、CHDFの効果等について検討した。【結果】術後MODSを来した症例は23例(3.87%)、救命率は47.8%であった。手術別頻度は胃癌手術後3.8%　結腸直腸癌手術後2.8%　肝切除術後11.1%で、救命率はそれぞれ80%　16.7%　28.6%であった。Sepsis非合併例の救命率が60%であるのに対し、合併例では38%であった。 MODS発症々例の術後血中lactate値は生存例17.8±6.0mg/dlに対し、死亡例では74.6±62.9mg/dlと高値だった。CHDF施行例の救命率は53.3%　非施行例は37.5%だった。【結論】1，下部消化管術後のMODSは予後不良。2，Septic MODSは予後が悪い。3，5臓器不全以上の救命は困難。4，術後血中lactate値の推移は、MODS症例の予後推定の指標となり得る。5，CHDFはMODSに対する治療法として有効。

376　腹腔内感染症の発症機構と多臓器不全

日本大学医学部第三外科[1)]、同細菌研究室[2)]
中山一誠[1)]、山地恵美子[2)]

〔目的〕近年教室で経験した嫌気性菌感染症 81 症例について集計すると単独感染 11 例(13.6%)であり、他の 70 例(86.4%)は混合感染である。その内容を詳細に検討すると嫌気性菌、好気性菌による混合感染例であることが判明した。そこでその病体生理を解明するため、ラット腹膜炎モデル作成に取りかかった。

〔方法〕Gelatin capsule 内に菌液を挿入した *B. fragilis*、*E. coli* 単独および混合感染の 3 群にて腹腔内酸化還元電位を測定し、更に ^{14}C-cefotetan を用い wholebody autoradiography を作成した。

〔結果〕*B. fragilis* 単独群では死亡例はなく、*E. coli* 単独群では、感染後 1 日以内に 38.5%が死亡した。一方、*E. coli*·*B. fragilis* 群では 2 日以内に 80-100%が死亡した。腹腔内酸化還元電位に関しては、生存群では平均－300mV、*E. coli* 単独群では－500mV、*E. coli*·*B. fragilis* 混合感染群では－700mV であった。その病態は、菌血症、内毒素血症、膿瘍形成および多臓器不全を示した。

NII-Electronic Library Service